

## テモテへの手紙第二章10節「死を滅ぼす福音」

### 1A 死の近づく人生

1B 老衰

2B 病い

3B 事故や事件

4B 滅びゆく世

### 2A 主イエス・キリストの現れ

1B 死を滅ぼされる方

1C 肉体における死

2C 墓からのよみがえり

3C 信じる者への復活の約束

2B 三つの死といのち

1C 霊において

2C 肉体において

3C 永遠において

### 3A 福音によるいのちと不滅

1B 死という敵

2B 朽ちないからだ

3B 永遠の都

## 本文

テモテへの手紙第二を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、今日からテモテ第二に入ります。午後に1章を一節ずつ見て行きますが、今朝は10節に注目します。「1:10 **今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不滅を明らかに示されたのです。**」今朝は、死を滅ぼされたキリストについて見て行きます。私たちが信じている福音が、死さえも滅ぼし、いのちと不滅を与えるものです。

### 1A 死の近づく人生

テモテへの第二の手紙は、パウロが間もなく、殉教する前に、彼がテモテに宛てたものです。自分が間もなく死ななければいけないということで、その死が寸前にまで近づいているので、それでテモテに自分の伝えたいことを伝えている手紙です。そして、テモテに自分が死ぬ前に会いたいという強い願いを書いています。時は、皇帝ネロがキリスト者に対する迫害を組織的に始めた時です。その指導者として、彼は斬首されます。

ところで、話が一気に変わりますが、私たちは間もなく8月に入ります。7月と8月は、暑い季節ということだけでなく、実は「死」を意識する季節でもあります。いろいろな意味でそうなのですが、一つは水難事故が多いです。ニュースで、子供が川遊びで溺れて死んでしまったという話を聞くと、心が苦しくなります。それから、熱中症による死もあるでしょう。そうした事故や病死もありますが、8月は、日本では死んだ人々のことを追悼する月になっています。広島と長崎、それぞれに原爆が投下された日です。そして終戦を迎えた日でもあります。

それから、先祖供養をする仏教の大きな時節に入ります。盆です。盆は、祖先の霊が戻って来るので、その霊を鎮めるための行事です。先祖の墓参りもあります。そして、祖霊がまたいなくなるので、その別れを惜しむために踊るのが盆踊りです。このように、いろいろな意味で死というものを意識してしまう季節です。

## 1B 老衰

人が死を意識するのは、誰もがそうですが年を取るとそうです。体の言うことが利かなくなっていく時に、そう思います。私はまだ50代ですが、そのことは少しずつ感じます。けれども、心が痛く、思うなるのは、これまで自分の好きだった人々、尊敬している人々が、一人一人、天に召されることです。チャック・スミスがこの世を去り、またビリー・グラハムが去って行った時に、ああ、一つの時代が過ぎ去ったと思いました。

伝道者の書の最後に、人が老衰して死んでいく様を、比喩的に描いています。自分の体が減んでゆく様を描いて、最後に、「土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る。」という言葉で終わります(12:7)。

## 2B 病い

そして人は、病によっても死に至ります。自分が病の中で、体が蝕まれ、それから人々が自分から少しずつ避けていくことを、ダビデは詩篇38篇の中で語っています。

- 5 私の傷は悪臭を放って腐り果てました。それは私の愚かさのためです。
- 6 私は身をかがめ深くうなだれ一日中嘆いて歩き回ります。
- 7 私の腰は火傷でおおい尽くされ私の肉にはどこにも完全なところがありません。
- 8 私は衰え果て砕き尽くされ心もだえてほえ叫んでいます。
- 9 主よ私の願いはすべてあなたの御前にあり私の嘆きはあなたに隠れてはいません。
- 10 私の胸は激しく鼓動し私の力は私を見捨て目の光さえも私から失せてしまいました。
- 11 愛する者や私の友も私の病を避けて立ち近親の者でさえ遠く離れて立っています。
- 12 私のいのちを求める者は畏を仕掛け私のわざわいを願い求める者は私の破滅を告げ絶えず欺くことを語っています。

自分の体が蝕まれるだけでなく、人々が自分から離れ、また悪だくみを考えている者たちさえいます。テモテへの第二の手紙でも、パウロが死刑になるのが近いのを知って、これまで一緒に福音のために働いていた者たちがいなくなってしまう現実が書かれています。なんと、つらかったことでしょうか。死というものには、このような過酷な現実はつきものです。

### 3B 事故や事件

そして、老衰や病は、自分の死期を意識して、その準備をすることができますが、事故や事件に巻き込まれると、その備えの時間がないという悲惨があります。私たちは、そうした事故や事件は、自分には来ないと、どこかで思っています。心理的に防御機制が働いて、突如として死が訪れると考えるのは生きられないからです。けれども、イエス様は、そうやっていつも、人に襲いかかる災いを他人事に行っていることについて、警告を発しておられます。「ルカ 13:4-5 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも多く、罪の負債があったと思いませんか。そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

### 4B 滅びゆく世

そして私たちは、自分の体が滅びることを、ひしひしと感じながら、この世界全体も滅びに向かっていることも感じています。主が語られている、天地が過ぎ去るといふしるしが、あちこちで見えます。天地に異変があり、そして、国々が騒いでいます。これまでにない秩序の揺れがあり、ついていくのができないし、できたとしても、心の疲れはかつて経験したことのないものです。イザヤも、激変が起こる幻を見た時に、次のように自分の体に衝撃が来ていることを表現しています。「イザ 21:3 それゆえ、戦慄が私の腰に満ち、子を産む時のような苦しみが私をとらえる。私は心乱れて、聞くことができない。恐ろしさのあまり、見ることができない。」

### 2A 主イエス・キリストの現れ

このように、私たちの生きている世界、また私たち自身の命は実際にはかないものです。「ヤコブ 4:13-14 「今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう」と言っている者たち、よく聞きなさい。あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。」霧のような存在なのだ、ということです。そして今、パウロは、自分の命が間もなく絶たれることを知っていて、その、はかないことを実感していたのではないのでしょうか。

### 1B 死を滅ぼされる方

それゆえ、パウロは、自分のためにも、テモテのためにも、自分たちの信じている福音を思い起こしています。「**今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。**」キリスト・イエスが現れてくださいました。そして、この方は私たちを死からいのちへと移されます。霊的に

活かしてくださいました。そして、肉体においてもそうです。私たちが死んでも生きるようにさせ、不滅へと導き入れてくださるのです。

コリント人への手紙第一 15 章には、死というのは「最後の敵」と表現しています。「15:26 最後の敵として滅ぼされるのは、死です。」とあります。神が、ご自分の造られた人について、最も願わなかったものは、死です。死とは、別れのことです。肉体における死は、魂が肉体から離れること、別れることを意味します。霊においては、神の御霊から人の霊が引き裂かれること、これを死と呼びます。イエス様が、過ぎ去らせてほしいと願われた杯は、神の御怒りの杯です。それを飲み干せば、どうなるか？主が、十字架の上で、「神よ、神よ、なぜわたしをお見捨てになられたのですか。」なのです。イエス様は罪を犯されていませんが、罪がその上に置かれました。そのために、父なる神から引き離されたのです。肉体の死だけでなく、神から引き離される死の苦しみを味わられたのです。とこしえの昔から父のふところにおられた独り子によって、これこそが最も恐ろしい苦しみをしました。

興味深いことに、最後の敵は悪魔ではありませんでした。黙示録 20 章を見れば、サタンが火の池に投げ込まれるのは、キリストの千年の統治の終わりの時です。それから天と地が過ぎ去って、白い大きな御座があります。そこで、人々がよみがえります。イエス様を信じない人々がずっと陰府の中にいましたが、こう書いてあります。「20:13-14a 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。」悪魔が滅ぼされた後に、死が滅ぼされています。そして新しい天と新しい地において、新しいエルサレムに住む人々について、「20:4 神は彼らの目から、涙をことごとく、ぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しきもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」とあります。死が滅ぼされて、永遠の慰めを受けているのです。

イエス様が、ラザロの死を悲しんでいるマリアや、そのその他のユダヤ人たちの姿を見て、憤られました。そして涙を流されたのです。(ヨハネ 11:33-35)主は、死というものが人々にどれだけの悲しみをもたらすのかを知っておられて、憤りと悲しみの混じった涙を流されました。

ゆえに、福音というのは、平和の君、正義の神が、一気に罪を滅ぼし、死を滅ぼすところの、征服なのだということです。圧倒的に力ある救いの君が、一瞬にして敵を滅ぼし、平和をもたらす、救いの勇士なのです。「ゼバ 3:17 あなたの神、【主】は、あなたのただ中であって救いの勇士だ。主はあなたのことを大いに喜び、その愛によってあなたに安らぎを与え、高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」と。」

### 1C 肉体における死

キリストは、この征服を、ご自身の死とよみがえりによって成し遂げられました。まず、ご自身の

死によって悪魔の脳天を打ち砕かれます。「ヘブル 2:14-15 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」

イエス様のすばらしさは、血と肉を持ってくださったということです。ですから、私たちがこの肉体において持っている弱さに同情できないことはないことです。私たちが、収容所に入れられた囚人たちだとしましょう。そこに、全く同じように、囚人の一人として、救出する隊員が隠れて入って来たようなものです。

そして私たちは、肉体の弱さを持っている中で、罪意識に苦しみます。病を持っている時に、その病が必ずしも罪から来ているわけではないですが、自分が何か悪いことをしたのか？と悩みます。詩篇にも、聖書に出てくる、いろいろな病の中にいる人々が、病と共に自分の罪について思い起こす詩や歌を残しています。自分が淫行の罪を犯して、それで性病になったのであれば、自分の罪から来ていますが、すべての病がそういうものではありません。けれども、はっきりしているのは、アダムが犯した罪によって、人々に病がもたらされ、死がもたらされたのです。

主は、その結果である病と死を、むち打ちと十字架によって受けてくださって、それで私たちを、罪から来る恐怖から救い出してくださいました。「イザ 53:4-6 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、【主】は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」この方が受けられた傷と死によって、私たちを責め立てる罪が、根こそぎ取り除かれました。

### 2C 墓からのよみがえり

そして主は、墓からよみがえられました！ご自分の死によって、悪魔の脳天を打ち砕き、それで余裕をもって、凱旋の行列の将軍のようにしてよみがえられたのです。主が、罪と死の力を征服されたことを、よみがえりによって明らかにされました。ペテロが説教しました、「使 2:24 しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」

### 3C 信じる者への復活の約束

この死とよみがえりによって、ご自分を信じ、ご自分につく者たちを、よみがえらせることができます。「ロマ 6:4-5 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬ら



れたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。」バプテスマのすごさが、ここにあります。私たちが、キリストにつくことを決めたので、その方にあるものを、私たちも恵みによって受け取ることなのです。戦争において圧倒的な勝利をおさめられた方が、その戦利品の分け前を、その人の気前の良さによって人々に分け与えるのと同じです。ご自身の死といのちにある、死への勝利を、私たちにも分かち合っておられます。

## 2B 三つの死といのち

イエス様は、マルタにこう言われました。「ヨハ 11:25-26 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。」

## 1C 霊において

主は、霊的ないのちと、肉体の復活の二つを語っておられます。後半の、「生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません」というのは、霊のいのちのことを語られています。アダムが罪を犯した時のことを思い出してください。彼は、罪を犯したのに肉体が死にませんでした。けれども、神が園を歩いていた時に、彼は身を隠しました。神との関係が切れてしまったのです。彼のからだは生きていましたが、すでに霊的に死んでしまいました。死というのが離別を表し、神から自分の霊から離れていることが、霊的な死を意味します。罪によって神から引き離されたのです。

しかし、イエスを信じると、罪が取り除かれ、御霊によって私たちの霊が生きます。私たちは、御霊によって新しく生まれたのです。キリストが内に住まわれ、この方のいのちを受けています。ですから、今も永遠のいのちを受けており、この肉体が滅んでも、そのいのちは取り去られることはありません。これが、イエス様がここで話している「生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません」です。

## 2C 肉体において

そして、「わたしを信じる者は死んでも生きるのです」というのは、肉体の復活のことです。肉体が滅んでも、それでもよみがえるのだということです。アダムは罪を犯して神から離れましたが、その肉体もいつか朽ちて行きました。アダムが生きたのは、創世記 5 章によると 930 年という長寿ですが、それでも死んでしまったのです。しかし、キリストが死からよみがえられたので、私たちの肉体は滅んでも、必ず復活します。それはキリストが再び来られる時です。主が戻って来られる時に生き残っているならば、一瞬にしてこの体が変わられて、お会いします。もしその前に死んだのであれば、復活してこの方にお会いします。死んでいる者も、生きている者も、このようにして、来

臨の主に、復活のからだ、栄光のからだでお会いして、主と共にいることになるのです。

### 3C 永遠において

そして大事なのは、「永遠に生きている」ということです。「永遠に決して死ぬことはありません」と言われていましたね。主によって生かされた者が、そのいのちが途中で途切れて、なくなってしまうものではない、ということです。私たちの生きている世界、この世というものには、必ずすべてが過ぎ去ってしまうようになっています。だから、せつかく生きても、また衰えて行くような、元の木阿弥になるというのが、今の世です。仏教の教えは、これに基づいています。輪廻転送というのは、生まれ変わりを約束します。けれども、次の世においても、また死が訪れ、生きている時の行いが悪いと、悪いところに生き返るとしてあります。いつまでも、いつまでも、「生まれてもまた死ぬ」という縛りの中に生きている世界を描いています。

しかし、聖書は違います。よみがえって、永遠のいのちを受けるか、よみがえって、永遠の滅びに定められるかのどちらかです。イエス様は、永遠のいのちのことを理解してもらうために、サマリアの女に、泉を語られました。「わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。(ヨハネ 4:14)」

泉というのは、すごいのです。この前、イスラエルに行きましたが、そこでヒゼキヤの地下水道を通りました。ギホンの泉から流れる水を、エルサレムの城内に流し入れて、アッシリア軍の包囲に対抗するために、地下トンネルを掘ったのです。ギホンの泉は城壁の外にあるので、城内にあるシロアムの池まで地下水道を造って、それで外に出なくても水をくみ取ることができるようにしました。それを掘ったのは、約、紀元前 700 年です。そして驚くことは、2700 年以上経っている、その地下水道に、今も、冷たい水が流れているのですから！いっしょにいた仲間が、これこそが、御霊のいのちなのだ！と感動していました。イスラエルの人たちが泉と聞く時には、「いつまでも途絶えることなく、永遠と流れるもの」ということなのです。

だから、天のエルサレムで、いのちの水が非常に強調されているのです。「黙 22:1-2 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。」自分の傷が何度も何度も思い出されたとしても、それでも、尽きぬことのない癒しが、いのちの木の葉によってもたらされる、ということです。

### 3A 福音によるいのちと不滅

このように、福音は、パウロが言っているように「いのちと不滅」を明らかに示しています。少し長くなりますが、第一コリント 15 章にある、死に対する勝利の箇所を読みましょう。

52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。54 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」55 「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。57 しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

### 1B 死という敵

死という敵があります。しかし、死はいのちに呑み込まれました。

### 2B 朽ちないからだ

そして、よみがえるのですが、それは朽ちるからだではなく、朽ちないからだなのです。かつて、銀河鉄道 999 は、死なないからだを得るための旅をしている SF の世界を描き、今は、サイボーグ化して、AI と VR で朽ちないからだを得ようとしています。所詮、そのからだは、地上の物を使っているのです。そのサイボーグの鉄でしょうか、合金でしょうか、朽ちて行くものであり、いのちを宿していない物質にしか過ぎないものです。しかし、朽ちないからだは、天から来ており、御霊のからだであり、罪を犯す前に神が用意してくださった、人に与えられたからだなのです。

### 3B 永遠の都

そして、朽ちないからだをもって、永遠の都に住みます。「黙 22:3-5 もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは世々限りなく王として治める。」